

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

<派遣生の基本情報>

氏名：吉井文美

所属先：人文社会系研究科日本文化研究専攻日本史学専門分野博士課程三年

派遣形態：大学院生個人派遣

<研究課題名>

The National Archives における日英・英中関係外交史料調査 -1937~1945-

<派遣先での活動>

(1) 派遣先の基本情報

国名：イギリス

都市名：ロンドン、オクスフォード、ケンブリッジ

コンタクトした主な研究者名： Dr. Seung-Yong Kim (University of Sheffield)

…派遣生が出国前にコンタクトを取り、お会いする約束をした研究者のみ御名前を挙げます。このほか現地にて、国際会議に出席の際や、留学生のご紹介を通して多数の研究者にお目にかかることができました。とくに史料状況に関する貴重な情報を教えて下さいました方々に、心よりお礼申し上げます。

(2) 派遣期間

出発日：2012年9月5日

帰国日：2012年10月2日

総日数：28日

<主な研究成果>

(1) 当初の計画の概要 (200)

報告者は、満洲事変以後、日本人が中国の政治・経済や秩序形成への関与の度合いを格段に高めるなか、「条約上の権利」に基づき中国で活動してきたイギリス人の企業が、いかに日本の影響を受け、それが日英関係をはじめとする東アジアをめぐる国際関係をどのように変容させたか考察している。本派遣事業を通して、イギリス公文書館(The National Archives)が所蔵する外交文書(FO371, 410,405 など)を閲覧し、現地企業が発する「条約上の権利」の保護を求める声はイギリス外務省にどのように届き、対日政策にいかん反映さ

れたのかを考察する手がかりを得る。

(2) 実際に達成された成果

FO371 はマイクロフィルムの形態で、たとえば東京大学総合図書館(Japan Correspondence)、台湾中央研究院郭廷以図書館(China Correspondence)等で閲覧できるが、ページによっては写りが悪く判読困難な箇所もある。したがって、本派遣事業では原本を確認し、今まで読にくかった箇所を、直接デジタルカメラで撮影した。FO410, 405 もイギリス外務省の基本史料であり、デジカメ撮影と画像データとしての保存作業を行った。

当初は公文書館でのこのような作業が、今回の派遣事業の中心になると考えていたが、各大学や資料館が所蔵する企業関連史料が、想像以上に充実していたため、予定を変更し派遣期間の半分をそれらの史料の閲覧・撮影に割り当てることにした。(そのため、本報告書における研究課題名と、実際に達成された成果との間にはやや相違が生じている。) 作業した場所と史料は、以下の通り。

ケンブリッジ大学図書館 (ジャーディーン・マセソン史料)、ロンドン大学 SOAS 図書館 (スワイヤー商会、チャイナ・アソシエーション史料)、オクスフォード大学ボドリアン図書館 (ネイザン文書)、HSBC アーカイブス (HSBC 史料)

以上の史料に関しては、主に 1931 年～1945 年の、中国支社とロンドン本社の間で交わした電報や、中国支社が作成した **political report** を中心に閲覧した。

(3) 今後の研究展望

まず、収集したイギリス企業の史料を読み、日本の中国侵略による社会の変化を現地社員はいかに受け止め、それを本国にどのように報告したのかを分析する。次に、イギリス本社はいかに現地状況を理解し、対策を講じたのか明らかにしたい。その上で、イギリス外務省の史料から、「条約上の権利」の侵害に対するイギリス外交の反応を考察してゆく。さらに報告者は、日本・中国側の史料を加えることで、東アジアにおける国際関係の変化を多角的に論じたいと考えている。

イギリス現地でお会いした先生方や大学院生の方々の情報により、イギリスでは企業関連資料を収めるアーカイブスが非常に充実していることを知った。今回未調査のアーカイブスを今後訪問し、細やかに中国で活動していたイギリス系企業の史料を活用したい。また、公文書館の大蔵省文書やイングランド銀行の史料を今後確認し、財政・金融がイギリスの東アジア政策に与えた影響も考察に加味しなくてはならないだろう。